

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381069

研究課題名(和文)ベルリンの就学前施設における道德教育の総合的研究

研究課題名(英文)A comprehensive study on the moral education of institutions for early childhood education in Berlin

研究代表者

吉田 武男 (YOSHIDA, Takeo)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40247945

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ベルリンにおける就学前施設(幼児教育施設)の取り組みを考察し、その特徴を検討した。具体的には、「ベルリン陶冶プログラム」と、そのプログラムの導入による就学前施設の改革の状況を道德教育の視点から明らかにした。その結果、「人格の発達」の名のもとに、一定の秩序に裏づけられた子どもの遊びや活動全体の中に、潜在的で間接的な道德教育の実態が明確となった。その成果は、幼児期を「道德性の芽生え」として捉えるだけの我が国の教育界に対して警鐘を鳴らすものである。

なお、公表については、研究成果として、『筑波大学道德教育研究』第16号(2015年)、日本道德教育学会第86回大会(2015年)等がある。

研究成果の概要(英文)：This research examine the attempts of institutions for early childhood education in Berlin and considered their characteristics. To be concrete, it reveals, from the point of view of the moral education, "Berliner Bildungsprogramm", and the state of a reform, which is guided by the introduction of this program.

As a result, the actual situation of moral education, which is latent and indirect, is clarified in the plays and the hole activities of children which are defined by certain orders in the name of "the development of the personality". This achievement should be warning for Japanese educational circles, who consider the infancy just as the period of the awakensness of morality.

This research is presented in "the bulletin of the moral education of University of Tsukuba" 16th issue (2015), and at the 86th academic conference of Japanese Society for Moral Education (2015).

研究分野：道德教育学、教育法法学

キーワード：道德教育 幼児教育 ベルリン陶冶プログラム

1. 研究開始当初の背景

本研究の大きな意図は、「道徳の時間」に副読本を子どもに読ませて、そのフィクション的な資料の中から道徳的価値を見つけさせるということを行ってきた我が国の道徳教育のあり方に対して、根本的な改善を目指そうとするものであった。なぜならば、「道徳の時間」の特設から50年もの歳月が経過したものの、青少年の規範意識の向上も見られないばかりか、最近再び問題視されている「いじめ」の防止に対しても、道徳教育はあまりにも無力の状態に陥っているからである。

そこで、我が国の道徳教育に対して発想の転換を促す意味で、「道徳の時間」という領域に道徳教育を閉じ込めることなく、各教科の授業や他の教科外教育における道徳教育の可能性について、研究代表者は20年以上にわたって自由ヴァルドルフ学校の理論と実践を中心に取り組んできた。最近の3年間は、科研費の挑戦的萌芽研究として、「環境モラル」に着目しながら、社会科や理科や生活科だけでなく、「総合的な学習の時間」における道徳教育の可能性も探究してきた。そうした研究を通して、道徳教育のような人格教育を単に就学期以後に計画的に実施するのではなく、就学期以前から就学期以後を視野に入れて行うことがとりわけ重要であるという認識に至った。

ところが、就学前教育に当たる我が国の幼稚園や保育所の教育・保育の活動においては、健康や言葉などに比べて道徳性は軽視されている。その傍証の一つは、日本の幼稚園教育要領に顕著に現れている。最も新しい2008(平成)年版の幼稚園教育要領になってはじめて、その第1章総則において、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり」という「人格形成」の文言が新しく加えられた。そのような加筆修正は高く評価されるべきものであるが、幼児期における道徳教育に関しては、その幼稚園教育要領の全体を眺めても、第2章「ねらい及び内容」に示された5領域の一つである「人間関係」の領域のなかで、旧版の幼稚園教育要領から、一字一句の変更もないかたちで、「道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、・・・(以下省略)・・・」と記されているだけであり、「道徳」という言葉も、他のところでは一回も登場していない。その点から見ても、我が国の幼児期の道徳教育は、重視されていない。それとは対照的に、ドイツの首都ベルリンの幼児全日施設では、幼児期段階から異文化社会における「人格の発達」という目的が掲げられ、「ベルリン陶冶プログラム」に基づいて、すぐれた研究と実践が行われている。その「ベルリン陶冶プログラム」は、『OECD 保育白書』(2011年)でも「子どもの自律性および種々の集団内で責任をもち民主的に生活する能力を強めること」に注

目されており、「人格の発達」を目指すベルリンの幼児教育の試みは、世界的にも高い評価を得つつあると言える。それゆえ、幼児期の段階から民主社会における「人格の発達」を視野に入れたベルリンの新しい試みを研究したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの長年のドイツ教育研究を踏まえ、ベルリンにおける幼児全日施設(Kindertagesförderung)の取り組みを道徳教育の視点から考察し、その特徴を解明するものである。その際に、世界的にも注目し始めている「ベルリン陶冶プログラム」(Berliner Bildungsprogramm)と、それによる幼児全日施設の改革動向に注目する。それによって、「道徳性の芽生え」として捉え、あまり道徳教育や人格形成に重きを置いてこなかった我が国の幼児教育の研究と実践に対して、教育的警鐘を鳴らすとともに、道徳教育や人格形成を重視した具体的な実践のあり方を提案する。さらに言えば、その研究によって、児童期や青年期に固守しがちな我が国の道徳教育研究の状況に対して、幼児期の道徳教育の重要性が強調されることになる。

特に、ベルリンの就学前施設における道徳教育の現代的特徴について、「ベルリン陶冶プログラム」を手がかりにしながら解明するとともに、日本の就学前施設における道徳教育の課題、ひいては日本の道徳教育全体の問題点を明らかにし、指導・支援の内容、教育・保育の環境の設定、教師・保育者の姿勢、保護者との連携などに関して、その解決策の基本的指針を提示できるところまで研究を進めることを目的とした。

3. 研究の方法

基本的な方向性としては、次のような方法で行った。

最初に、我が国の就学前段階における教育の様相について、道徳教育に焦点を当てながら考察し、我が国の実態を今一度確認しておく。その際に、幼稚園や保育所とともに、認定こども園の実態を押さえ、そこに共通する特徴を明らかにする。

次に、ベルリンの「ベルリン陶冶プログラム」を中心にして、就学前段階における教育、特にその時期の道徳教育や人格形成のあり方について、時代背景とともに、文献資料で確認する。

さらに、ベルリンの現地で、教育委員会や公立施設、それに加えて私立の自由ヴァルドルフ幼稚園などを訪問し、研究資料を収集するとともに、実践の様子を観察したうえで調査を実施する。

以上の作業を実施し、ベルリンにおける幼児教育の実態と改善の方向性を明確にし、次回の我が国の幼稚園教育要領改訂までに、有効な示唆を得る。

また、年次別に具体的に言うと、次のように本研究を計画的に進めた。

平成 25 年度においては、文献調査と現地調査を並行して行った。そのうえで、ドイツの幼児教育の予備調査と文献を収集した。

文献調査については、我が国の幼児期の道德教育に関する研究書や研究論文および実践報告書、さらには審議会報告書などを収集し、我が国の実態と状況を明確にした。また、ベルリンにおける幼児期の道德教育の実態と改善的試みについての資料も収集し、分析を進めた。その際に、ベルリンに関連する資料だけでなく、比較の意味で、それ以外のドイツの都市・地域に関連する資料も収集した。また、それらに加えて、OECD やユネスコの幼児教育の資料も収集した。

現地調査については、ベルリンの就学前教育を行う施設を予備調査した。

平成 26 年度においては、ベルリンの幼児全日施設を中心に現地調査を行った。そこでは、PISA ショックや移民の増加や貧困差などの影響によって、さらなる改革が行われ、現場もそれなりの混乱を起こしていた。その過程で、幼小接続の問題がクローズアップされるようになっていた。実際に、『新入生の保護者のための案内書』も新たに作成され、発行されていた。その文書の記述内容を分析しながら、幼児期における道德教育の特徴の一端を明らかにした。

平成 27 年度においては、「ベルリン陶冶プログラム」の内容それ自体を詳細に分析するというのではなく、プログラムの重要な理論上の特徴を確認しながら、プログラムに基づいて実践されているひとつの就学前施設に着目して、その施設における実践の特徴とともに、実際の道德教育の方法の特徴を解明しようとした。さらにより具体的・实际的に言えば、その施設における実践の観察と、施設の教員・保育者へのインタビュー調査を行うとともに、施設の教員・保育者全員に配布されている手引書の内容を詳細に分析した。

なお、本研究における主要参考文献(著書)は、以下のとおりであった。

文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍、2008 年

文部科学省『小学校学習指導要領解説道德編』東洋館出版、2008 年

文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版、2008 年

文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版、2008 年

文部科学省『小学校学習指導要領解説理科編』大日本図書、2008 年

文部科学省『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』東洋館出版、2008 年

文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館、2008 年

内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレール館、2015 年

厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレール館、2008 年

文部科学省『別冊初等教育資料 9 月号臨時増刊「特別の教科 道德」の実施に向けて』東洋館出版、2015 年

泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店、2008 年

OECD 編、星三和子・大和洋子・一見真理子訳『OECD 保育白書』明石書店、2008 年

佐藤学・澤野由紀子・北村友人編『揺れる世界の学力マップ』明石書店、2009 年

『表現活動を生かした道德の時間 実践例と資料』広島大学附属三原小学校教育研究会、1996 年

『教育課程』広島大学附属三原幼稚園、2011 年

『平成 25 年度 広島大学附属三原学校園第 16 回幼小中一貫教育研究会 文部科学省研究開発学校指定校 社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発(第 2 年次)』広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校、2013 年

『平成 26 年度 広島大学附属三原学校園第 17 回幼小中一貫教育研究会 文部科学省研究開発学校指定校 社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発(第 3 年次)』広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校、2013 年

広島大学附属三原学校園編『21 世紀型教育への提言～幼小中一貫で育つ子どもたち～』溪水社、2008 年

広島大学附属三原学校園編『幼小中一貫で育てる「かかわり力」～広島大学附属三原学園での 12 年間～』溪水社、2010 年

『国立大学・学部の附属学校園に関する調査研究～附属学校園の実態と課題、今後の附属学校園の展望～』日本教育大学協会附属学校委員会、2016 年

②①小田豊・押谷由夫編『保育と道德 道德性の芽生えをいかにほぐくむか』保育出版社、2006 年

②②佐伯胖『幼児教育へのいざない 円熟した保育者になるために [増補改訂版]』東京大学出版会、2014 年

②③大和久勝・今関和子『対話と共同を育てる道德教育』クリエイツかもがわ、2014 年

②④河野哲也・土屋陽介・村瀬智之・神戸和佳子『子どもの哲学 考えることをはじめた君へ』毎日新聞出版、2015 年

②⑤中戸義雄・岡部美香編『道德教育の可能性 その理論と実践』ナカニシヤ出版、2005 年

②⑥吉田武男『「心の教育」からの脱却と道德教育 「心」から「絆」へ、そして「魂」へ』学文社、2013 年

- ⑳吉田武男・相澤伸幸・柳沼良太『学校教育と道徳教育の創造』学文社、2010年
- ㉑福田弘・吉田武男編『道徳教育の理論と実践』協同出版、2013年
- ㉒中西真彦・結城章夫・吉田武男・村上和雄・土居正稔『道徳教育の根拠を問う 大自然の摂理に学ぶ』学文社、2015年
- ㉓ Berliner Bildungsprogramm fuer die Bildung, Erziehung und Betreuung von Kindern in Tageseinrichtungen bis zu ihrem Schuleintritt, Kiliansroda, 2005.
- ㉔ Senatsverwaltung fuer Bildung, Jugend und Wissenschaft Hrsg, Schulbeginn 2015: Ein Ratgeber fuer Eltern der Schulanfaenger, Berlin, 2014.

4. 研究成果

まず、「ベルリン陶冶プログラム」に記された幼児教育の構造的基盤とともに、幼児期の道徳教育の特徴が明らかになった。

具体的に言うと、ドイツでは、教育目標は、「社会における倫理的規範的信念に基づき、さらには社会的な発展の分析に基づいたもの」であり、幼児に対しても、「陶冶」の方向として「人格発達」が目指されていた。そのような大きな社会の枠組を前提としたうえで、「人格発達」を意識した幼児全日施設の目標が定められていた。そこでは、人格発達を促す能力として、四つのコンピテンシーがあげられていた。すなわち、「自我コンピテンシー」「社会的コンピテンシー」「事実コンピテンシー」「学習方法的コンピテンシー」である。さらには、それらの「コンピテンシー」を育てる領域として、七つの領域、つまり、「身体と運動と健康」、「社会的、文化的環境」、「コミュニケーション」、「造形的表現」、「音楽」、「数学の基礎体験」、「自然科学、科学技術の基礎体験」が示されていた。これらの七つの領域は、あくまでも「外界習得のための経路」であって、それ自体が教育の目的ではない。あくまでも各領域は手段である。したがって、外界を習得していく過程、つまり陶冶のプロセスの中で、「いかに人格を形成するか」が重要である。この点に関しては、七つの領域ごとに、教育目標を四つのコンピテンシーに区分しながら、「子ども側からの意義」の区分を組み合わせて具体化を図っているところに、その特徴は垣間見られた。そこでは、全体的に、「人格発達」にかかわる実際的な行為が重要視されていた。特に、「社会的能力」にかかわるところでは、道徳的な行為の育成が多く含まれていた。しかも、現代的な社会問題にもつながる現実社会に通用する道徳的な行為が取りあげられている。つまり、ドイツでは、共生や協同などの市民社会の形成者を「陶冶」の方向性として意識するために、現実社会を強く意識した道徳性の育成が幼児期の教育から行われていたと言えよう。

次に、このような「ベルリン陶冶プログラ

ム」に基づいた幼児教育の実践が、現実に行われていることをひとつの施設において検証した。その結果、次のようなことが特質として確認できた。すなわち、ベルリンの「幼児教育施設」の活動を道徳教育の視点から眺めると、「人格発達」の名の下に、一定の秩序に裏づけられた子どもの遊びや活動全体の中に、潜在的で間接的な道徳教育の姿が垣間見られた。特に幼児期から、寛容と責任という道徳的価値は教えられており、単なる判断力や心情ではなく、基本的な生活習慣に関しては、道徳的価値の習慣化が強く求められるとともに、自分のよさを気づかせるためにポートフォリオの共同的作業が組み込まれていた。

また、現地調査を行う中で、激動する首都ベルリンの最近の動向についても確認できた。特に、幼小接続の課題が明確になり、求められる就学前教育の特徴が明らかになった。簡潔に言えば、次の三点である。

第一は、「教育」と「陶冶」の重視であり、「世話」の側面が弱まったことである。つまり、就学前教育は、学校化の色彩を強めているということである。第二は、第一の特徴と重なるが、知育重視の傾向は見られるものの、「教育」と「陶冶」という両方がつねに大切にされていることである。第三は、多様化の尊重である。

以上見てきたように、ドイツの幼児教育、特にベルリンの幼児期の道徳教育は、日本のそれと比較して大きく異なっているということが明確になった。より具体的に言えば、幼小接続の視点から求められるベルリンの就学前教育においては、「思いやり」や「感謝」などのような細分化された道徳的諸価値を個々に育てる、あるいは目覚めさせるというような狭義の道徳教育の発想はほとんど見られなかった。あくまでも広義の道徳教育の視点から生涯の「人格」形成を目指して、学校における「社会的態度を発達させること」「能力を獲得すること」「内容を学ぶこと」のために、就学前教育においては、その準備段階として、「新たな学習環境を開きそれに好奇心を持って出会う能力」、それを下支えるような、それぞれの子どもの多くの達成感が求められていたのである。その意味では、「道徳性の芽生えを培う」道徳教育からいっこうに発展しない日本の幼児期の道徳教育、座学的な物語教材の道徳授業に執着する日本の小中学校の道徳教育を考えると、本研究で検討したベルリンの「幼児教育施設」の試みは大いに参考になると考えられる。特に、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育」の在り方を再考してみると、ベルリンのこの試みは、教育段階の差異を越えて有益な示唆を与えてくれるのであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

吉田武男、相賀由美子「ベルリンの幼児教育施設における道徳教育 『ベルリン陶冶プログラム』に着目して」(『筑波大学道徳教育研究』、第17号、2016年、87-97頁、査読無し)

吉田武男、相賀由美子「ベルリンにおける幼小接続の視点から求められる就学前教育の特徴 『新入生の保護者のための案内書』に着目して」(『筑波大学道徳教育研究』、第16号、2015年、83-96頁、査読無し)

〔学会発表〕(計 1件)

- 吉田武男、相賀由美子「ドイツの幼児教育施設における道徳教育 ベルリン市に着目して」日本道徳教育学会第86回大会、2015年11月21-22日、岡山大学(岡山県岡山市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 武男 (YOSHIDA, Takeo)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40247945